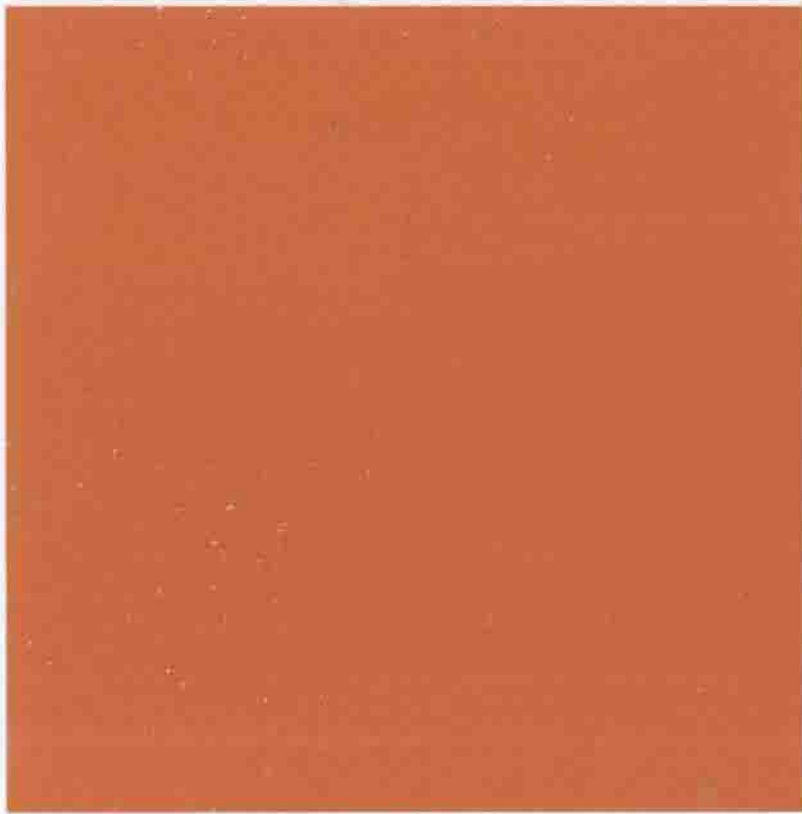


最高に贅沢なクラシック

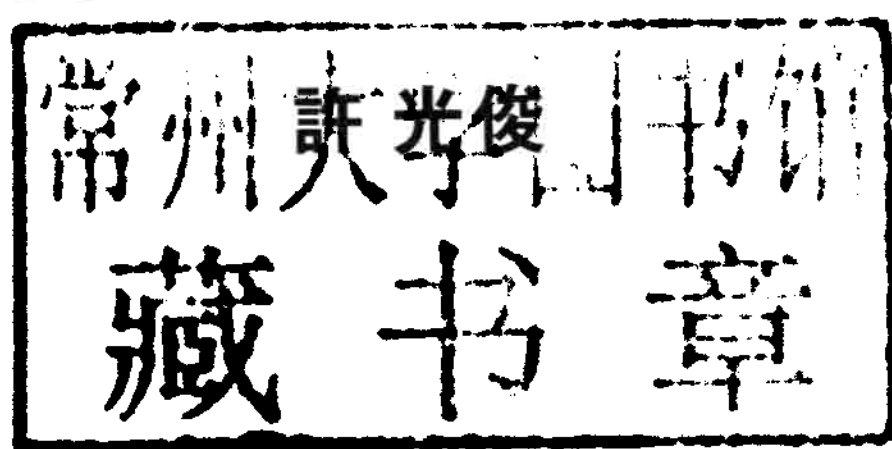
許 光俊



講談社現代新書

2161

最高に贅沢なクラシック



講談社現代新書

2161

講談社現代新書 2161

最高に贅沢なクラシック

二〇一二年六月二〇日第一刷発行

著者 許光俊 きよ みつとし © Mitsutoshi Kyo 2012

発行者 鈴木哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二-一 郵便番号 一一二一八〇〇一

電話 出版部 〇三―五三九五―三五二一

販売部 〇三―五三九五―五八一七

業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者 中島英樹

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。〔R〕(日本複製権センター委託出版物)

複写を希望される場合は、日本複製権センター(電話〇三―三四〇一―二三八二)にご連絡ください。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

最初に 芸術をめぐるタブー

9

ブルーストは裕福だった／音楽の中にある贅沢な感覚／日本のミニマリズムは貧乏くさい？／浪費はあっても豊かさはなかった／「感覚の倫理」もしくは「経験」

序の章 香港 東京の隠喩としてのアジア都市

25

穏やかな海と南方的な緑に囲まれた空港／香港文化中心へ／ホテルを選ぶ／香港芸術祭を狙う／居心地の悪さ／本物との出会いとは／マカオでクラシックを聴く場違い

破の章 オーストリア 夢と知りつつ貫徹するたくらみ

45

二重性を持つ街／幸福のイメージの提示／ウィーン・オペラの実状／ムジークフェラインザールの音響／志が低いウィーン・ファイル／アーノンクルの古楽／「意味」

を問う人／身についた贅沢／夢と現実の対置

急の章 イタリア 夢と現実がつながるところ

立見席は礼賛できるか

フィレンツェ——イタリアを代表する芸術の都

オペラハウスが位置する地区／言葉にされない風習／美しさを捨てないリアル／絵空事が可能なオペラ／すばらしいワインリストとトラットリア・チブレオ／郷土料理の力とヴェルデイの「レクイエム」／外国人が活躍する意味／クラシックにふさわしい街とは

モデナ——車好きの聖地

移動の自由は人間の基本的な自由／「生の一瞬」のために感覚を研ぎ澄ます／オペラハウスのボックスにすわる意味／イタリア料理の精華を味わう／小さな街にある価値

ヴェネツィア——陶醉に誘う街

商都の発想／ヴェネツィアには雪がよく似合う／カルパッチョとベツリーニのアリア／「うちに伝わる味！」／ラ・フェニーチェは世界でもっとも美しいオペラハウス／決して誉められない上演／沈みゆく街の沈みゆく墓地

ミラノ——ラ・スカラがあればこそその街

ヴァイオリンの糖蜜のような甘さ／退屈とは醜悪なものだ／「やさしく、静かに」席を譲る男性／ボックス席を経験する楽しみ

転の章 ドイツ 花咲く幸福の下で

芸術に高い敬意を表する国／贅沢と裕福のさりげない雰囲気／クラシックは豊かさや文明の象徴

ミュンヘン——「密かなるドイツの首都」

修道士とビール／人気のあるアウグステイナー／オペラハウスで注がれるシャンパ

ンは偽物／バイエルン州立歌劇場の聴衆の柔軟さ／豪華で過剰なハイカルチャー／
食の理想主義／高級でありながら親密であること／わが道を行くミュンヘン

ベルリン——突き抜けたコンサートを聴く喜び

美的な伝統がない／ベルリンのあか抜けなさ／非ベルリン的なフィッシュヤース・フ
リッツ／高級ホテルが安い／ベルリン・フィルの特徴／オーケストラにここまでで
きるのか！／ラトルのマーラー／オーケストラが心から歌っている／マーラー・チ
クルスの白眉／ベルリン・フィルの鈍さ／ベルリン・フィルとポルシェの共通点

ドレスデンとライプツィヒ——ドイツ音楽の精髓

世界でもっとも美的に洗練されたオーケストラ／劇場的陰謀／いまだ残る東側の匂
い／真冬のオペラハウスは幻想的風景／ティーレマンとシュターツカペレ／ブラー
ムスの音楽がわかった／世界最高峰のオーケストラを楽しむルート

承の章 フランス 明るい官能の楽しみ

北方的なパリ、南仏の入りロリヨン／現代建築家によるオペラハウスの再構築／本質を忘れたホール建築／「美食の都」という称号は過去のもの／旅に値する食事／明快でいながら情熱的な大野和士の音楽／大野のベスト・パフォーマンスはワグナ

1

183

起の章 六ヶ所村 文明の究極としての演奏会

荒涼と皮肉の六ヶ所村／破壊的で暗黒のピアニスト、ポゴレリチ登場／ロマン主義とは苦しむことの歓喜／壊れたピアノを弾き続ける鬼神／文明とクラシック音楽

199

後書きにかえて モラルとしての豊かさ

211

最高に贅沢なクラシック

許 光俊

講談社現代新書

2161

目次

最初に 芸術をめぐるタブー

9

プルーストは裕福だった／音楽の中にある贅沢な感覚／日本のミニマリズムは貧乏くさい？／浪費はあっても豊かさはなかった／「感覚の倫理」もしくは「経験」

序の章 香港 東京の隠喩としてのアジア都市

25

穏やかな海と南方的な緑に囲まれた空港／香港文化中心へ／ホテルを選ぶ／香港芸術祭を狙う／居心地の悪さ／本物との出会いとは／マカオでクラシックを聴く場違い

破の章 オーストリア 夢と知りつつ貫徹するたくらみ

45

二重性を持つ街／幸福のイメージの提示／ウィーン・オペラの実状／ムジークフェラインザールの音響／志が低いウィーン・ファイル／アーノンクルの古楽／「意味」

を問う人／身についた贅沢／夢と現実の対置

急の章 イタリア 夢と現実がつながるところ

立見席は礼賛できるか

フィレンツェ——イタリアを代表する芸術の都

オペラハウスが位置する地区／言葉にされない風習／美しさを捨てないリアル／絵空事が可能なオペラ／すばらしいワインリストとトラットリア・チブレオ／郷土料理の力とヴェルデイの「レクイエム」／外国人が活躍する意味／クラシックにふさわしい街とは

モデナ——車好きの聖地

移動の自由は人間の基本的な自由／「生の一瞬」のために感覚を研ぎ澄ます／オペラハウスのボックスにすわる意味／イタリア料理の精華を味わう／小さな街にある価値

ヴェネツィア——陶醉に誘う街

商都の発想／ヴェネツィアには雪がよく似合う／カルパッチョとベツリーニのアリア／「うちに伝わる味！」／ラ・フェニーチェは世界でもっとも美しいオペラハウス／決して誉められない上演／沈みゆく街の沈みゆく墓地

ミラノ——ラ・スカラがあればこそその街

ヴァイオリンの糖蜜のような甘さ／退屈とは醜悪なものだ／「やさしく、静かに」席を譲る男性／ボックス席を経験する楽しみ

転の章 ドイツ 花咲く幸福の下で

芸術に高い敬意を表する国／贅沢と裕福のさりげない雰囲気／クラシックは豊かさや文明の象徴

ミュンヘン——「密かなるドイツの首都」

修道士とビール／人気のあるアウグステイナー／オペラハウスで注がれるシャンパ

ンは偽物／バイエルン州立歌劇場の聴衆の柔軟さ／豪華で過剰なハイカルチャー／
食の理想主義／高級でありながら親密であること／わが道を行くミュンヘン

ベルリン——突き抜けたコンサートを聴く喜び

美的な伝統がない／ベルリンのあか抜けなさ／非ベルリン的なフィッシャース・フ
リッツ／高級ホテルが安い／ベルリン・フィルの特徴／オーケストラにここまでで
きるのか！／ラトルのマーラー／オーケストラが心から歌っている／マーラー・チ
クルスの白眉／ベルリン・フィルの鈍さ／ベルリン・フィルとポルシェの共通点

ドレスデンとライプツィヒ——ドイツ音楽の精髓

世界でもっとも美的に洗練されたオーケストラ／劇場的陰謀／いまだ残る東側の匂
い／真冬のオペラハウスは幻想的風景／ティーレマンとシュターツカペレ／ブラー
ムスの音楽がわかった／世界最高峰のオーケストラを楽しむルート

承の章 フランス 明るい官能の楽しみ

北方的なパリ、南仏の入りロリヨン／現代建築家によるオペラハウスの再構築／本質を忘れたホール建築／「美食の都」という称号は過去のもの／旅に値する食事／明快でいながら情熱的な大野和士の音楽／大野のベスト・パフォーマンスはワグナ

1

183

起の章 六ヶ所村 文明の究極としての演奏会

荒涼と皮肉の六ヶ所村／破壊的で暗黒のピアニスト、ポゴレリチ登場／ロマン主義とは苦しむことの歓喜／壊れたピアノを弾き続ける鬼神／文明とクラシック音楽

199

後書きにかえて モラルとしての豊かさ

211

最初に 芸術をめぐるタブー

この世には、口にしないほうがよい真実というものがある。そんなことは、よほどおめでたい人間でない限り、誰もが知っていることだ。

人はあえて沈黙する。言えば摩擦が起きる。憎まれる。嫉妬される。排斥され、最悪の場合には、殺される。

僕は今から二〇年以上前、ある友人が漏らしたひとことを今でもよく覚えている。彼はフランス文学者の卵。その当時、パリに留学していた。暗くて閉じこもりがちな人間も多い文学研究者の中にあつて、珍しいくらい社交的な明るい人物だった。ただ、お坊ちゃん気質というのだろうか、ものをずけずけ言う傾向があつた。

そんな彼が、何気なく口にしたひとことによつて、周囲の日本人留学生たちから大顰蹙^{ひんしゆく}を買つたのだつた。